

STATEMENTS 213 2019



行動するシンクタンク
一般財団法人 下関21世紀協会
Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

新しいまちづくりに挑戦

一般財団法人下関21世紀協会 会員 林 昂史

将来は下関市のために何か挑戦したいと考えるようになったのは、社会人5年目を迎える頃でした。両親や親戚は下関市出身で、地元へUターンする事に対してそれほど迷いはありませんでした。では、何に挑戦するため下関にUターンをしたのか？と質問を受けることがあります。答えは1つで、新しいまちづくりに挑戦したいと思ったからです。

大学時代、経済理論のゼミ教授や先輩の進路指導があり、野村證券株式会社へ入社しました。社会人としてのマナー以外にも経済・ビジネス・株式・政治の基礎知識を叩き込みました。20年間続けたサッカー経験のおかげで、朝5時起床、毎日100件以上の訪問営業にも耐え、主に経営者、弁護士、医者、地主など様々なお客様と資産運用を通じて勉強させて頂きました。もともと、経済を学び将来は起業を視野に入れていたため、ベンチャー起業の経営者にも直接アポを入れ、相談などしていました。その中で、株式会社ビズリーチの創業者、南壮一郎氏(2014年世界経済フォーラム ヤング・グローバル・リーダーズ、2016年ダボス会議)と出会い、強い覚悟を持って転進を決意しました。当時200名程度だった会社が今では1300名まで成長し、夜遅くまで一緒に汗を流して働いた同僚や南社長には、感謝の想いしかありません。

父からの電話

証券会社で鍛え上げた基礎知識と、急成長企業で育んだベンチャー精神を学び、事業づくりの楽しさを理解し始めた頃、父から一本の電話がありました。「下関市のために頑張ってみないか？」これまでの過程を全て見ていたかのようなタイミングで正直驚きました。それからは仕事と両立しながら、休日の時間を利用して下関市の現状と未来について考えました。



Uターン

下関にUターンしてからは採用支援のコンサル会社を起業し、民間の方との人脈形成や、まちづくりの現場を学ぶために21世紀協会や様々な団体へ入会しました。昨年8月、関門海峡花火大会は運営メンバーとして初めて携わせて頂き、地域の方々との交流の中でまちの活気を肌で感じる事が出来、嬉しかったです。なによりも、幼い頃から見てきた花火大会がここまでの人数の方々の協力や企業の協賛があって成り立っていることに大変驚きました。

本質は変わらない

私は、まちづくりと事業づくりの本質は変わらないと思っています。まちづくりにも、事業づくりにも、ヒトやモノ、カネ、チエの要素が掛け合わさり成り立ちます。そこに、強いリーダーシップが加わると飛躍的に加速します。リーダーは、断固とした目標を掲げ、決断、スピード、行動、巻き込む力が求められますが、私たちはリーダーを支えながら学び続けなければなりません。若者世代が市外へ流出していることが地方自治体の大きな問題となっていますが、若いリーダーが顕在化している地方自治体は改革が進んでいます。私は若者世代の先頭に立って情報を届け、巻き込み、新しいまちづくりに挑戦して行きます。今はとにかく失敗を恐れず、チャレンジあるのみです。

